



✿ 解明がもとめられるポスト・アンコール期の都

アンコール・ワットで有名なカンボジアのアンコール王朝(9世紀～15世紀)は、国内に多く残存する石造建造物や碑文等の研究により、その歴史が徐々に解明されつつあります。しかし、ポスト・アンコール期とよばれる、アンコールが廃都となった15世紀から、フランスがカンボジアを保護国化するまでの時代は、史料が乏しく、これまで発掘調査等もほとんどおこなわれてこなかったため、いまだ謎につつまれた部分が多くあります。アンコールが放棄された後、ポスト・アンコール期のクメール人の都はバサン(コンボン・チャム州)、プノンペン(現在の首都)、ロンヴェーク(コンボン・チナン州)、ウドン(カンダール州)と移動します。ロンヴェークは16世紀に、ウドンは17世紀に建設されたといわれる都です。

文化庁より受託した拠点交流事業として、カンボジアの文化芸術省と奈良文化財研究所は、ロンヴェークとウドンを対象にした共同事業を2010年に開始しました。その目的は、ロンヴェークおよびウドン地域において考古学調査を実施し、調査に必要な地下探査、測量、発掘、遺物保存処理等に関する技術を、カンボジアの若手専門家に対して移転することです。発掘調査には、カンボジア王立芸術大学考古学部卒業の若手研究者が参加し、発掘準備と運営に係る測量基準点の設置、地形測量、遺跡の探査、発掘、記録、整理、成果のとりまとめ、遺物保存に至るまでの過程を現場で学ぶことができるようにプログラムを立てました。

まず、ロンヴェークとウドンにおいては、どのような遺構がどれほど残されているのかも不確かなため、遺跡インベントリーと地図作成を目指し、踏査と表面採集調査、試掘調査をおこないました。結果、ロンヴェークだけでも100以上の遺構が存在し

ていることがあきらかになりました。また、村人からの緊急的な遺物出土情報と文化芸術省からの要請により、ロンヴェーク中心部から北西15キロの位置にあるクラン・コーという村でも調査・研修をおこないました。

クラン・コーは、村人が畑で発見した陶磁器等から、ロンヴェークとの歴史的な関連性が深いと考えられています。発掘の結果、クラン・コー村から、複数の墓葬と、輸入陶磁器、在地土器、鉄製小刀やガラス製小玉などの副葬品が出土しました。クラン・コー遺跡の発見です。アンコール王朝期の実態解明に世界が注目し、国際的な研究・支援や協力がアンコール遺跡群に集中するなかで、ポスト・アンコール期の研究は、まだ始まったばかりであり、更なる調査研究が求められています。

本事業では、計6回の調査・研修をおこないました。この間、現場研修を受講した若手研究者は50名以上におよびます。準備から発掘、成果報告まとめ、遺物整理、保存処理までの一貫した研修を受けた成果として、近い将来、若手研究者主導による発掘が、カンボジア国内で実施されることが期待されます。

(企画調整部 田代 亜紀子)



クラン・コー遺跡調査の様子

🌀 発掘調査の概要

キトラ古墳の調査（飛鳥藤原第173-8次調査）

奈良文化財研究所では、2010年6月にキトラ古墳の石室内調査を実施し、石室の構造や石材の状態、朱線や棺台痕跡の残存状況等を精査し、記録作業をおこないました（飛鳥藤原第170次調査）。しかし、石室南壁の盗掘孔には石室に入るための進入装置が設置してあったため、装置に覆われた部分については、十分な検討ができませんでした。

そのため、今回は進入装置を取り外し、盗掘孔周囲を中心に調査を実施しました。期間は2013年2月18日から27日まで、調査は奈文研、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会の3機関が共同でおこないました。

調査では、石材の形状や、表面に残る加工痕跡、石材相互の組み合い方等を精査し、実測、拓本、写真撮影、3Dレーザー測量等様々な方法で詳細な記録をとりました。これにより、2010年度の調査成果とあわせ、石室内全体の記録が揃いました。

また、今回は、2010年度調査の時より石室内の状態が良好であったため、新たに50カ所以上で石材に描かれた朱線の残存部分を確認できました。これまでの成果もあわせ、同一直線上にのるものを1本として算出すると、確認できた朱線は合計で24本分になります。これらの朱線は、石材を加工する際の基準として用いられたと考えられます。

今回の調査で、キトラ古墳の石室内についての調査は最後になります。今後は、石室閉鎖および古墳の整備へと移っていきますが、今回得られた新知見やデータを、今後の整備・活用に役立てていきたいと考えています。（都城発掘調査部 若杉 智宏）



3Dレーザースキャナーによる測量

甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第177次調査）

甘樫丘は、飛鳥川の西岸に位置する標高145mほどの丘陵です。『日本書紀』には、皇極天皇3年(644)に蘇我蝦夷・入鹿の邸宅が営まれたことが記されています。

奈良文化財研究所はこれまで、丘陵東麓の谷の一つで継続的な調査をおこなってきました。その結果、7世紀前半から8世紀初頭にかけて、大規模な造成をとまなう活発な土地利用がおこなわれていたこと、谷の入り口付近と奥とで土地利用の様相が異なっていたこと等があらかになっています。

今回の調査地は、継続調査をおこなってきた谷から北東に尾根を一つ越えた小さな谷、およびその西側の斜面と尾根の上です。調査区の面積は、あわせて1038㎡。調査は2012年12月に開始し、現在も継続中です。

尾根の上と斜面の調査区では、残念ながら古代の明瞭な遺構は確認できませんでした。谷部分では、調査区西部で緩斜面に広がる拳大～人頭大の石のまとまりが見つかりました。これらの石は古代のものと思われますが、詳細については、なお検討中です。また、調査区東南部では、谷の埋め立て土とみられる層が厚く堆積している様子を確認しました。かつては今よりも深い谷が、南東に向かって開いていたようです。

調査地は、近年まで果樹園として利用されていました。遙か古代には、果たしてどのように利用されていたのでしょうか。今後の展開にご期待ください。

（都城発掘調査部 桑田 訓也）



緩斜面に広がる石の集積（南西から）

平城宮跡東院地区の調査(平城第503次)

平城宮は東側に東西約250m、南北約750mの張り出し部を持ち、その南半約350mの範囲を東院地区とよんでいます。東院地区では、『続日本紀』等の文献から、皇太子の居所である東宮や天皇の宮殿がおかれたことが知られています。

奈良文化財研究所では、2006年度から、東院地区西辺部の重点的な発掘調査を継続しています。今回の調査は、西辺部から中枢部にかけての遺構の様相を引き続きあきらかにすることを目的としました。調査面積は1015㎡で、2012年12月17日に調査を開始し、2013年5月22日に終了しました。

今回の調査では、奈良時代の複数の時期にわたる掘立柱建物、掘立柱塀、溝、土坑、壇状遺構等を検出しました。これらの各遺構は周辺の調査成果をあわせて1期から6期までの6時期に区分できます。

今回の調査成果として、奈良時代末頃の過去の調査で見つかった回廊を検出したことが特筆できます。南側から続く長大な南北棟建物が、今回の調査区の中ほどで東に曲がり、更に東へ続くことがあきらかになり、この建物は東院中枢部を区画する回廊であることが判明しました。これにより、奈良時代末頃の東院中枢部が回廊で区画されており、今回の調査区はその北西隅にあたることがあきらかになりました。

奈良時代末頃、東院地区には宝亀4年(773)に完成した光仁天皇の「楊梅宮」という宮殿があり、この宮殿において天皇、貴族による儀式や宴がおこなわれていたことが記されています。今回検出した回廊は、この「楊梅宮」を区画する施設である可能性

が高く、今後この回廊に囲まれた内部の施設や周辺の建物等、「楊梅宮」の実態をあきらかにする必要があります。

また、今回検出した回廊は掘立柱の単廊形式で、梁行20尺(約6m)という規模の大きな建物です。東院地区では奈良時代中頃に同様の規模の回廊が中枢施設を囲む建物として確認されています。また、規模は異なりますが、奈良時代後半にも掘立柱の単廊形式の回廊が確認されています。

これらの成果をふまえると、東院地区の中枢部では、掘立柱の単廊形式の回廊で区画する施設が、奈良時代中頃以降、継続して建てられていたことがわかります。これは、複数回の建て替えにより規模や位置を変えながらも、東院地区中枢部では回廊に囲まれた空間が継続的に使用されていたことを示し、儀式や饗宴の場として継続的に利用された東院地区の性格の一端を示唆すると考えられます。

今回の調査から、大型掘立柱建物や総柱建物群が並び立つ東院地区西辺部と、回廊に囲まれる中枢部との空間利用の違いがあきらかになってきました。これらの成果は、東院地区全体の遺構変遷や空間利用のあり方を解明する上で重要な手がかりとなります。

なお、3月30日には現地説明会を開催しました。桜満開の絶好のお花見日和の中、820名の方々にお越しいただき、平城宮跡の発掘調査に対する関心の高さを感じました。東院地区の調査はこれからも続きますので、今後の調査の進展にどうぞご期待ください！

(都城発掘調査部 小田 裕樹)



調査区全景(西から)



現地説明会の様子(北東から)

飛鳥資料館 写真コンテスト

Asuka Historical Museum
Photo Contest

飛鳥資料館では2012年から「飛鳥資料館 写真コンテスト」を開催しており、今年の春で3回目を迎えました。回を重ねるごとに応募作品の数も増え、注目度が高まってきており、来館者の方々にも好評を博しております。

この写真コンテストでは、飛鳥・藤原地域の歴史に関わる作品を募集し、入賞者に「飛鳥資料館官位」を授与しており、飛鳥資料館らしく「古の都ならでは」にこだわった写真コンテストとなっております。これは、単なる美しい風景写真を集めたコンテストというわけではありません。悠久の歴史を感じさせる写真表現という、コンテストのコンセプトに最もふさわしい写真に「正一位」が授与されます。更に、展示した応募作品の中から来館者の皆様による投票で「従一位」を決定します。

ここでは、これまでにコンテストで「正一位」を授けられた方々の入賞作品をご紹介します。撮影者のコメントからは、古の都に対する思いが伝わってくるのではないのでしょうか。 (飛鳥資料館 成田 聖)

第2回写真コンテスト

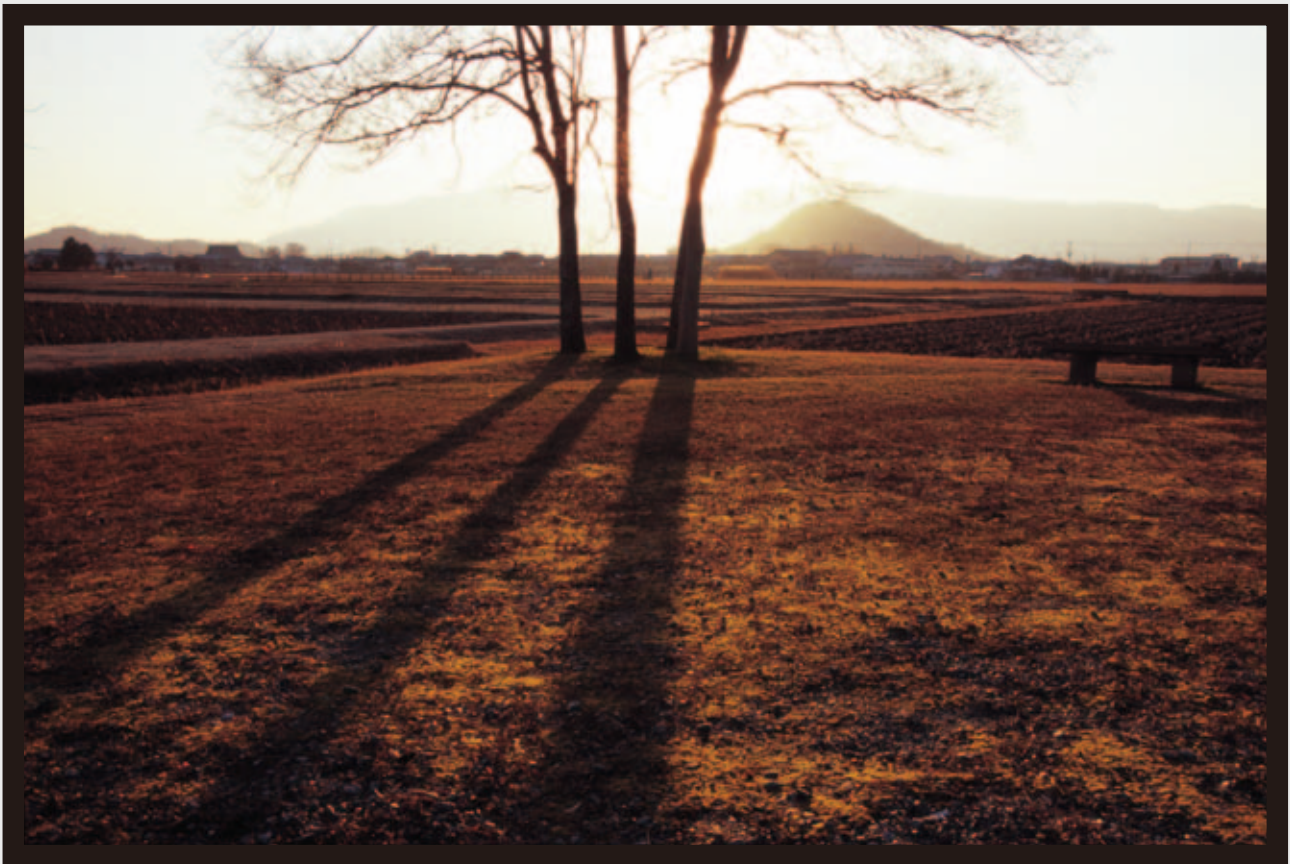
2012年8月4日～9月17日

遥かなる華の都

正一位 華都写真太政大臣

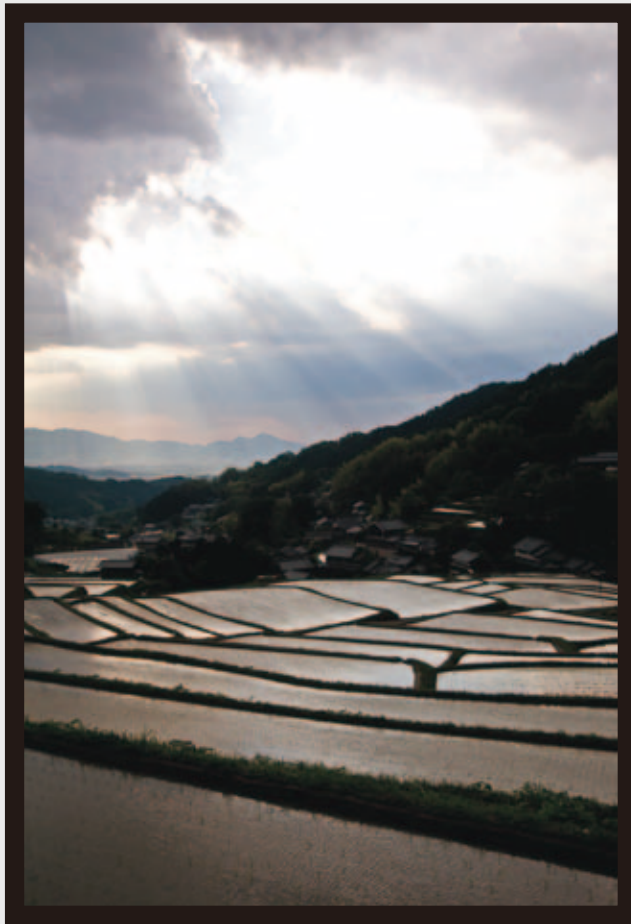
藤江 宏 様

「歴史の大地・夕映え」



入選者作品コメント

この度は栄えある「正一位 華都写真太政大臣」賞を賜り、望外の喜びです。日本初の藤原京の都が地下に眠っている。710年 平城京に遷都してから、1300余年後の今もその大地を夕陽が黄金色に照らし出し、見る者、思う者を遠い昔の歴史的舞台へ誘ってくれる。そんな思いを込めて撮った一枚です。やはり、奈良大和路の風景には、歴史的景観と記紀万葉景色が一番似合う気がする。



第1回写真コンテスト
2012年2月11日～3月4日

知られざる 飛鳥の情景

正一位 情景写真太政大臣
宮田 哲治様 「降臨」

入選者作品コメント

満々と水を湛えた棚田が重なり合う明日香村細川は、同村の中でも高い位置にある集落である。

その細川の集落の彼方に望む二上山に夕陽が入るとき、その赫赫たる輝きを受けて棚田は真っ赤に染まる・・・。

この光景がいわゆる細川の「定番写真」となる。その光景に出会うために、私自身も何年にもわたり数え切れないほど足を運んだ。

ただ今回の「飛鳥資料館」の写真コンテストは、「知られざる飛鳥の情景」というテーマで募集されたため、普段知られていない「細川の表情」を切り取った作品で応募した。

雲の割れ目からこぼれた光が「光芒」となって、細川の棚田に降り注ぐ一瞬を捉えた作品である。

まるで「農業の神様」が今年の豊作を約束するかのよう、「姿」を見せられたように感じた。

第3回写真コンテスト
2013年3月9日～4月14日

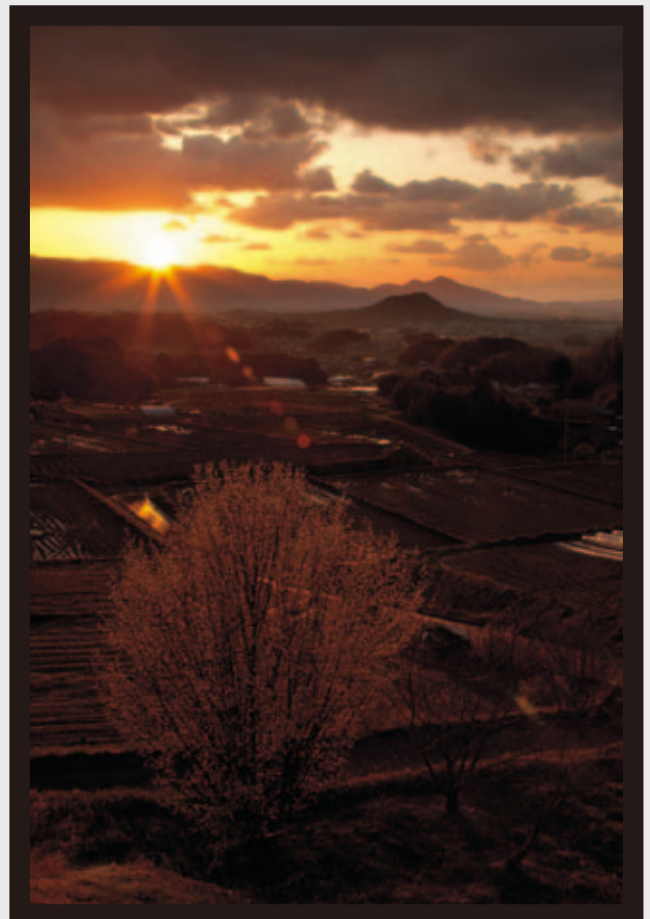
神々の山

大和三山のある風景

正一位 神々之山写真太政大臣
白石 博様 「サンシュユの咲くころ」

入選者作品コメント

この度は栄えある「正一位 神々之山写真太政大臣」という賞を頂き、驚きと喜びでいっぱいです。今回のテーマは「神々の山」という事で、私が好きな明日香村から望む畝傍山を選びました。撮影当日は朝から雨が降っていました。夕景は駄目だろうと思っていたのですが日没前に雨が止み、雲の切れ間から夕日が顔を出してくれました。雨上がりのおかげで道や畑などが光り輝き、素晴らしい光景でした。中でも今回の主役・サンシュユが特に光り輝いていました。諦めていたところに出会ったこの素晴らしい光景に嬉しくなり、夢中でシャッターを切ったのを覚えています。今回の受賞を励みに、これからもより一層精進していきたいと思っています。



庭園の歴史に関する研究会

奈良文化財研究所では、庭園に関する調査研究をおこなっており、平成23年度からの第3期中期計画においては、中世庭園の研究に取り組んでいます。これは第1期中期計画(平成13～17年度)における奈良時代までの庭園の研究、第2期中期計画(平成18～22年度)における平安時代庭園の研究を引き継ぐもので、その流れの中で2011年度から、様々な分野の専門家を招いて「庭園の歴史に関する研究会」を開催しています。この研究会は、分野の異なる研究者がそれぞれの領域の専門的観点から庭園について考察することによって、新たな知見を得ようというものです。

2011年度は「鎌倉時代の庭園一京と東国一」、2012年度は「禅宗寺院と庭園」をテーマに、庭園史学・造園学の研究者のほか、考古学、国文学、美術史学、建築史学等の専門家が参加しました。

2012年度の研究会について簡単に紹介しますと、まず研究発表が5つあり、その後それらの発表を受けて総合討議がおこなわれました。研究発表は、西芳寺庭園の一部にある石組の作者、庭園と山水画の関係、禅僧夢窓疎石の事績を中心とした禅宗と庭園のかかわり、日本における禅宗伽藍と庭園の関係、日本と南宋の禅宗寺院建築および庭園等が主題として取り上げられました。続く総合討議では、日本と南宋の禅宗伽藍および庭園、禅僧夢窓疎石、山水画と庭園・假山といった3つの話題を中心に、各参加者が専門的な視点から意見を交わしました。

奈文研では、今年度以降も引き続き、足利將軍関連の庭園、戦国時代の庭園文化等をテーマに研究会を開催し、中世の庭園について更に掘り下げていく予定です。(文化遺産部 中島 義晴)



研究会の様子

『文化財論叢Ⅳ』の刊行

昨年10月、奈良文化財研究所創立60周年を迎えたことを記念し、『文化財論叢Ⅳ』が刊行されました。『文化財論叢』は、これまで30、40、50周年の節目に刊行されてきました。今回で4冊目にあたるこの論文集は、奈文研に在籍、あるいは関連する研究者総勢78名の日ごろの研究成果が収録されたもので、論文76編、1479頁と、これまでで最大のボリュームになっています。

奈文研の研究職員の専門分野は、考古学、文献史学、建築史学、造園学、保存修復科学、年輪年代学、環境考古学等多岐にわたっています。この論文集の内容も文化財に対する総合的なもので、扱っている時代は旧石器時代から近代まで、地域も日本列島のみならず、中国、韓国、東南アジア等本当に様々です。また、文化財の保護や活用に関する研究成果についても収録しています。

松村所長が序言のなかで、「個人研究と共同研究は車の両輪であり、両者の密接な提携なくしては良好な研究成果は期待できない。研究所の研究成果は、常に共同研究の中で切磋琢磨された個人研究が核となる」と述べています。『文化財論叢Ⅳ』はこれを具現化したものといえるでしょう。そして、われわれは今後も研究活動をつづけていきます。

なお、この『文化財論叢』は、この5月『文化財学の新地平』と改題して、吉川弘文館から発売されています。ご興味がある方は、ぜひ手に取っていただき、文化財研究の最前線に触れてみてはいかがでしょうか。(奈文研ニュース編集委員会)



これまでになかったボリュームとなった文化財論叢Ⅳ

文化財レスキュー活動

マグニチュード9.0という巨大なエネルギーをもった東北地方太平洋沖地震(2011年3月11日14時46分頃発生)とそれにともなって発生した大津波は、東北地方にきわめて大きな被害をもたらしました。この東日本大震災により多くの文化財も被災し、国指定の文化財、県および市町村の指定文化財、また、未指定のものを含めると、その数は膨大なものとなります。

奈良文化財研究所は、3月30日に文化庁の要請により結成された東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会に参加し、この2年間、様々な文化財レスキュー活動を展開してきました。博物館、美術館あるいは文化財収蔵施設における被災文化財の救援活動、津波等により水損した紙資料の応急処置、文化財の救援に必要な物資の提供、被災文化財を搬送する車両(ワゴン車と4tトラック)の提供、被災文化財レスキューのための募金活動等です。被災地での救援活動には40名を越える研究系職員が派遣されています。また、派遣や物資の搬送にかかわる事務手続きには事務系職員があたりました。被災地現地での前線活動と研究所における後方支援が全所的に展開されました。

特に、水損した紙資料の応急処置では、奈良市場冷蔵株式会社の御協力による資料の搬送と冷凍保管、奈文研および関西地区の諸機関(奈良県立橿原考古学研究所、兵庫県立考古博物館、神戸市埋蔵文化財センター、姫路市教育委員会)における真空凍結乾燥、NPO法人書物の歴史と修復に関する研究会によるクリーニング作業という一連のシステムが確立されました。この協力体制は、今後の水損紙資料のレスキューにも活かされるものです。

(埋蔵文化財センター 高妻 洋成)



大型真空凍結乾燥機による水損紙資料の乾燥

復興事業に伴う発掘調査に対する奈良文化財研究所の取り組み

現在、東北地方太平洋沖地震の被災各地では、復興事業に伴う多数の発掘調査がおこなわれ、全国の地方公共団体から派遣された多くの埋蔵文化財専門職員の方々がその支援にあたっています。その発掘調査は、復興事業の遅れ等が生じない様、迅速化と効率化を旨としておこなわれています。

奈良文化財研究所としてもこれまで培った様々な発掘調査関連技術により支援をおこなうべく準備を進め、派遣要請が出された場合、その内容に応じて即座に職員を派遣する体制を整えています。すでにいくつかの地方公共団体には職員を派遣し、福島県広野町桜田Ⅳ遺跡や宮城県気仙沼市波怒棄館遺跡の発掘調査等に対して、地中レーダー探査技術、3Dレーザー測量・写真測量技術(埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室)、デジタル一眼レフカメラを使用した高所リモート撮影技術(企画調整部写真室)による発掘調査支援や、貝塚出土の動物遺体の分析(埋蔵文化財センター環境考古学研究室)、比較的短期間の発掘調査員の派遣(都城発掘調査部)等をおこないました。

奈文研による支援事業はまだ端緒についたばかりですが、被災地が落ち着きを取り戻すその日まで、できる限りの支援を全所的な対応として継続する予定です。(都城発掘調査部 渡辺 丈彦)



高所リモート撮影技術により撮影した桜田Ⅳ遺跡

飛鳥資料館 夏期企画展「飛鳥・藤原京を考古科学する」

遺跡の発掘調査や文化財の調査研究、あるいは保存修復をおこなう上で、遺物の材質・構造調査、遺跡の環境調査、動植物遺存体による古環境の復元、木質文化財の年代測定、遺跡の計測・探査等、自然科学的手法を応用した調査研究はたいへん大きな役割を果たします。これらは「考古科学」と呼ばれており、奈良文化財研究所では埋蔵文化財センターが中心となって研究を進めています。

飛鳥・藤原京の調査においても、こうした考古科学の活躍は目覚ましいものがあります。そこで今回は、飛鳥・藤原京を主な舞台に、発掘調査から整理作業、保存・活用まで、さまざまな場面における考古科学の役割と成果を、分かりやすく紹介する展覧会を企画しました。実際に調査で用いた機器類とともに、調査の対象となった考古資料もまじえつつ、奈文研における考古科学の最前線を紹介します。

(飛鳥資料館 丹羽 崇史)

会 期：2013年8月1日(木)～9月1日(日)

開館時間：9:00～16:30(入館は16:00まで、年末年始・月曜休館)

ギャラリートーク：8月4日(日)13:30～ 8月18日(日)13:30～

ホームページ：<http://www.nabunken.go.jp/asuka/index.html> お問合せ：☎0744-54-3561(飛鳥資料館)

平城宮跡資料館 夏期企画展「平城京どうぶつえん—天平びとのアニマルアート—」

今年の夏、資料館に「平城京どうぶつえん」が期間限定オープンします。

ウマにサル、ヒツジやイノシシ、カメにトリ…そしてニンゲンまでも…！平城宮・京を発掘して、ひょっこりと姿をあらわした動物たちに大集合してもらいます。彼らは、土器や硯、形代や木片など、あちこちにひそんでいます。

今にも動き出しそうな猿の墨画土器、尖ったしっぽが愛らしい土馬、美しい毛並が表現された鳥形の硯など、当時の動物たちの生き生きとした姿を楽しむとともに、天平びとが彼らに注いだまなざしを感じてみてください。

会期中、夏休み期間の金曜日には、子ども向けの楽しい講座やワークショップを開催予定です。是非、お子様連れで、1300年前の動物たちに逢いにきてください。

(企画調整部 中川 あや・渡邊 淳子)

会 期：2013年7月13日(土)～9月23日(月・祝)

開館時間：9:00～16:30(入館は16:00まで、月曜休館・月曜が祝日の時は翌日)

ギャラリートーク：7月26日、8月2・9・16・23・30日(夏休み期間の金曜)14時30分～

ハカセのどうぶつ講座やワークショップ

ホームページ：<http://www.nabunken.go.jp/heiyo/museum> お問合せ：☎0742-30-6753(連携推進課)



考古科学調査機器類と高松塚古墳版築のはぎ取り



■ お知らせ

平城宮跡資料館 夏期企画展

2013年7月13日(土)～9月23日(月・祝)

「平城京どうぶつえん—天平びとのアニマルアート—」

飛鳥資料館 夏期企画展

2013年8月1日(木)～9月1日(日)

「飛鳥・藤原京を考古科学する」

特別公開講演会(東京会場)

2013年9月22日(日)

■ 記録

文化財担当者研修

○建築遺構調査課程

2013年6月10日～14日 10名

○中近世城郭調査整備課程

2013年6月17日～21日 25名

○建造物保存活用基礎課程

2013年6月24日～28日 16名

現地説明会

○平城第503次発掘調査(平城宮跡東院地区)

2013年3月30日 820名

飛鳥資料館 写真展

2013年3月9日～4月14日

第3回写真コンテスト

「神々の山—大和三山のある風景—」 3,069名

平城宮跡資料館 春期企画展

2013年3月16日～6月2日

「発掘速報展 平城2012」 39,179名

飛鳥資料館 春期特別展

2013年4月26日～6月2日

「飛鳥寺2013」 9,406名

■ 最近の本

○『文化財学の新天地』 吉川弘文館 2013年4月

○『改訂新版 日本古代木簡字典』 八木書店 2013年4月

○『仁和寺史料 古文書編一』 吉川弘文館 2013年5月

編集 「奈文研ニュース」 編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.go.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2013年6月